11月

そうだ！田舎にくらそう
2017

元・川西町地域おこし協力隊の6年後のお話。
企画・構成・文・撮影etc...全部 ： 渥賀旭
イラストモデル ： チャッピー（元・小巧家）

「さざえ堂」

会津に行くと、白虎隊もそうですが「さざえ堂」にも行きます。実は子供の頃に来た覚えがあるのです。なぜ覚えているのでしょうか？それは、飯盛山で売っている木刀、ハチマキを買ったことがあるからです（笑）
今回、あらためてお土産を見ると、さざえ堂Tシャツが売ってました。弟が買いました。これ着て、地下鉄に乗るそうですwww
それにしても、飯盛山は何でも有料なんですよね。仕方ないといえば仕方ないのですが、やっぱり、観光で人を呼ぶのは大変なことだと思います。
だって、子供の頃に買った木刀がまだ売ってましたから。。。

「夢の秋」

あー、こんなにも秋は過ぎ去ってしまうものなのか…。ということで、日に日に寒くなるこの季節、センチメンタルな気分になる人も多いでしょう。そこで、先日みた夢の話をしましょう。
僕はディレクターでした。ホームページに作家の対談を掲載するため、今が旬の有名作家を2名ブッキング。ファミレスよりすこしお洒落な店に来てもらいました。まずは、聞き手のベテラン作家、男の五十代くらい。メガネをかけて小太り。髭を生やした威厳のある感じ。まず、その人が店に来た。
「あー、また話をこじらせる人なんだろうな」という作家に対する偏見とは裏腹に、その人は、ON,OFFのきいた大人という印象だった。
対談時間はなぜか10分と決まっていた。挨拶もそこそこに、椅子に座ってメモをとりはじめた。「10分だよね？そうかー」何やら考えている
僕はマイクのセッティングをする。ボイスレコーダでいいのでは？と思うが、夢の中ではミキサーとマイクを持っていた。そんなこんなしてるうち、対談相手の女性作家がやってきた。
その人は、黒縁のメガネをかけて、前髪がビシッとそろった黒髪のショートカットで華奢な人だった。青い長袖のシルクのシャツを着ていた。「遅くなりましたー」声はけっこういい、透き通る感じの。Emの曲が似合いそうな感じ。
で、早速、対談に入る。ベテラン作家が話しかける、女性作家が話す。
最初のやりとりは聞き逃した、そのとき、女性作家のマイクがoffになっていたことに気づく。onにして、マイクを向けようとしたらケーブルが届かない。
二人は向き合って話しているのに、女性作家だけは、話すときだけ横のマイクにかがんで顔を近づけなくてはならない。ミキサーのコネクタが思いっきり引っ張られ外れそうになった。これではいけないと思い、マイクに手を伸ばした。すると、その人が
「これ、かえてもらっていいですか…」とマイクを見て、場違いな存在を指すように言った。
夢はここで終わった。
結局、何のメッセージだかよくわからない。でも、ここまで鮮明に覚えているのもなかなかだ。
夢について最近わかったことは、夢に出てくる場面は、基本的に現実世界とリンクしている。時間軸がバラバラで様々なものが合成される。たとえば、その日はライブでギターを弾きました。寝る前にヨーロッパの街角の風景をずっと観ると、夢の中で、ヨーロッパの街角でギターを弾く自分がいるわけです。
確信を持てるのは、これは自分に関係のあることだということ。物語のメッセージを推測すれば先のことまで見えてくる、それが本質だったりする。作家は変わり者で近づきにくいはずが、常識人だった。その常識人とは大人のことだった。メモをとる＝準備をする。作家よりも完璧な準備をしたはずなのにマイクのケーブルが届かなかった自分。年上の男＝ベテラン。年下の女＝新人。ベテラン＝新人が成立する世界、実力主義。シルクの青いシャツ＝特別な何か＝才能。華奢＝弱いというイメージのはずが、マイクをかえるという要求をしてくる。ディレクターという自分の専門領域にNOという作家、場違いな存在が本質をとらえる瞬間。何かを表現するための創造力は、こういうセンテンスの積み重ねだと思う。原動力がどこにあるかわからないが、自分の創作活動に活かされていて、とても満足です（笑）